

北海道教育大学教職大学院における「命の教育」プロジェクトの取り組み

北海道教育大学教職大学・「命の教育」プロジェクトチーム

代表 教職大学院長・教授 井門正美

シンポジウム企画・教授 安川禎亮

事務局長・特任教授 梅村武仁

事務局総務・准教授 川俣智路

1. 「命の教育」プロジェクトの基本方針策定と研究の成果

私ども北海道教育大学教職大学院の「命の教育」プロジェクトは、本厚生労働科学研究費補助金(代表本橋豊「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」〈平成 26 - 28 年度〉)に、昨年(2016 年)10 月に参加したことから始まった。

本橋代表(自殺総合対策推進センター長)は、3 年前(2014 年 3 月)まで勤務されていた秋田大学で、公衆衛生学の立場から、特に自殺率が全国トップであった秋田の自殺対策に取り組み顕著な成果を収められた。実は、本チームの代表である井門も一昨年(2015 年)3 月までは秋田大学に在籍し、16 年間勤務しており、秋田大での最後の 2 年間、教員免許状更新講習推進センター長の任にあったが、このセンターを管轄する理事・副学長が本橋先生だった。本橋先生が秋田大を去る際に、医学と教育学の関連領域での共同研究を約束したが、このことが、本研究に関わる端緒となった。

この研究に参加するに当たり、私どもの教育実践研究を担う教職大学院としては「命の教育プロジェクト」とした。幼児、児童生徒、学生、大学院生、そして保護者に対して、命の大切さ、生きることの意味・意義を伝えることを改めて教育の根幹と捉えなければならないという強い意識からである。いま、学校関係者の様々な努力にもかかわらず、子どもたちの自尊感情の低さ、他者への思いやりや倫理観の欠如が問題視されている。いじめ、虐待や DV、自殺など、命に関わる問題が社会基盤を揺るがす大きな問題ともなっている。教育実践では、自殺は最も重いテーマで喫緊の課題だが、その自殺を生じさせる社会環境や教育環境、学校組織や教師そのものの在り方を問い直し、問題を改善することこそ、教育実践研究の基盤であると捉え、命を大切にし、生きることへの志向性を促進することを目的とした。

このような目的を達成するために、主要な教育実践研究の 6 つの柱を次のように設定し、取り組むことにした。

- ①人間形成と成長の基盤となる教育として、「心を育てる読書教育」
- ②日々の悩みや人間関係の軋轢等から自身を解放する「ストレスマネジメント教育」
- ③苦難やストレスに耐え立ち向かう「レジリエンス教育」
- ④保健衛生に留意し体づくりや健康を促進する「健康教育」
- ⑤自殺者を一人でも減少させる人間関係や社会基盤づくりを推進する自殺総合対策「命の教育」(特に、SOS の出し方・気づき方教育、自殺対策学習)
- ⑥教職大学院講義と教員免許状更新講習への「命の教育」の組み込み

まず、①の「心を育てる読書教育」では、健やかな生活や成長を促進し、自己実現を支援する図書

(児童書、一般書)の収集と紹介を行う。現在、本学教職大学院では、札幌校、旭川校、釧路校、函館校(平成 29 年度開校)の 4 校に図書を配架している。また、これとは別に、「命の教育」に関する教員や大学院生用の研究書・専門書を購入した。教育研究・実践を推進する上で必要となる文献・論文等も収集し、教師教育の観点から児童生徒、学生を指導する教員の資質向上を図ることをめざしている。

次に、②の「ストレスマネジメント教育」と③の「レジリエンス教育」については、日常生活、すなわち、学校や職場、家庭等でのストレスを如何に回避するか、解決するか。ストレスとは何か、また、その対処方法をどうすればよいのか。これらを学ぶことによって、自身の健康や生命を守る手立てを身につけることができる。併せて、レジリエンス(resilience)、すなわち、日本語では「精神的回復力」「抵抗力」「復元力」「耐久力」「防御力」「逆境力」とも言われる力をつける教育も大切である。これらの教育についても取り組んでいく。

そして④の「健康教育」は、保健衛生や医療に関する基本的な知識と技能、健康や体力の維持・促進に関する知識や技能を身につけさせる教育である。こうした教育は、学校では、特に養護教諭や保健体育の教員の役割が重要となる。また、保健医療関係者や機関との連携促進を図ることも大切である。私どもはこのような教育にも積極的に取り組みたい。

続いて⑤の「自殺総合対策」については、上記①～④を含む自殺に関する総合的な対策の中で、教育が果たす役割の重要性を改めて確認し、温かい社会や組織づくりを促進する教育を展開する。特に学校や学級においては、学習者に自己有用感や自尊心と他者存在の意義を実感させ、温かで信頼し合える集団生活を送ることができるようにする学校組織マネジメントを重視する。自殺という喫緊の重要課題については、子ども達には SOS の出し方教育、教師や保護者には SOS の気づき方教育、両者併せて自殺対策学習を展開したい。

最後に⑥「教職大学院講義と教員免許状更新講習への『命の教育』の組み込み」については、すでに、本学教職大学院の講義科目では、「生徒指導の意義と今日的課題」「『生きる力』を育む学級・学年経営の実際と課題」「学校組織マネジメントの理論と実際」等の講義内容に組み込んでいる。また、学校の教員を対象とした教員免許状更新講習でも、「キャリア教育の方法」「学校文化と教師」「動作とイメージを使ったストレスマネジメント教育」等の講義を実施している。

以上、本プロジェクトの基本方針を示したが、何分にも昨年 10 月からの参加であり、本科学研究で実施する主要な事業として、「命の教育2017シンポジウム」と「命の教育プロジェクトホームページの構築」の 2 つを行うことを定めた。後者については、研究実践の 6 つの柱のコンテンツを掲載することとしたが、いずれについてもほぼ骨子となるコンテンツを制作し、掲載することができた。

「心を育てる読書教育」では、公益社団法人全国学校図書館協議会の三上久代氏(全国 SLA 学校図書館スーパーバイザー)のご協力を得て推薦図書一覧を掲載できた。また、後述する基調講演者の本橋豊氏やシンポジウムをコーディネートした研究メンバーの安川禎亮氏、指定討論者の阪中順子氏、シンポジストの今川洋子氏、上島博氏、吉川和代氏、さらに、スタッフとして関わっていただいた上村雅代氏(北海道教育大学附属小中学校スクールカウンセラー)にも貴重な研究実践資料をご提供いただいた。御礼申し上げたい。

なお、命の教育プロジェクトは、本厚労科学研究の期限に限られるものではない。2017(平成 29)年度からは、教職大学院の組織的な研究実践として取り組むことになってる。

2. 「命の教育2017シンポジウム」の開催

先に述べたように、本プロジェクトでは2つの事業を実施した。その一つとして本年3月19日(日)に実施した「命の教育2017シンポジウム」について報告したい。

| 厚 | 生 | 労 | 働 | 科 | 学 | 研 | 究 | 費 | 補 | 助 | 金 |

「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」最終事業

命の教育2017シンポジウム

テーマ 自殺総合対策における「命の教育」

— 生きる支援に向けたSOSの出し方教育 —

日時 2017(平成29)年
3月19日 (日)
13時30分～16時30分 (開場13時)

会場 ホテルポールスター札幌
2階メヌエット
〒060-0004 札幌市中央区北4条西6丁目 TEL.011-241-9111

参加費 無料 事前にお申込みください

命の教育

氏名、所属、連絡先を記入の上、下記に送信ください。
[e-mail]inochi.kyouiku@gmail.com
[F A X]011-778-0614
(事務局：井門正美研究室)

い ま、学校における懸命な努力にも関わらず、自ら命を絶つ児童生徒の問題が後を絶ちません。要因として、自尊心の低さ、人間関係の希薄さ、他者への思いやりの欠如、いじめ、不登校、虐待・DVなど、命に関わる様々な問題が指摘されています。社会基盤を揺るがすこうした事態に鑑み、今回、特に自殺問題に対処する総合的な対策を具体的に考える「命の教育2017シンポジウム」を開催致します。

プログラム

《総合司会》梅村 武仁 (北海道教育大学教職大学院特任教授)

1	趣旨説明	13時30分～13時40分	井門 正美 (北海道教育大学教職大学院教授・教職大学院長)
2	基調講演	13時40分～14時40分	「生きる支援に向けた児童生徒のSOSの出し方教育～国の政策の今後の方向性」 本橋 豊 (自殺総合対策推進センター・センター長)
3	シンポジウム	14時50分～16時10分	《企画・司会者》安川 禎亮 (北海道教育大学教職大学院教授) 《指定討論者・話題提供者》阪中 順子 (西天王寺中学校SC、文部科学省児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議委員) 《話題提供者》今川 洋子 (北海道深川保健所健康推進課長) 上島 博 (元奈良県香芝市立五位堂小学校教諭) 吉川 和代 (奈良県五條市立宇智小学校養護教諭)
4	総括	16時10分～16時30分	反町 吉秀 (自殺総合対策推進センター・地域連携推進室・室長)

主催 北海道教育大学教職大学院・「命の教育」プロジェクトチーム 共催 自殺総合対策推進センター 後援 北海道教育委員会 札幌市教育委員会

会場地図

JR札幌駅
センチュリーロイヤルホテル
北5条手稲通
六花亭札幌本店 アステイ45 北洋銀行
ホテルポールスター札幌
北海道庁

図1 命の教育2017シンポジウムのポスター・チラシ

では、シンポジウムの内容について紹介する。本プロジェクトチーム代表井門による「趣旨説明」は、冒頭の「命の教育プロジェクト」の基本方針を述べているので省略する(本論稿の最後に掲載した【参考資料】を参照のこと)。なお、以下は、当日の発表原稿を掲載する。

(1) 基調講演 「生きる支援に向けた児童生徒のSOSの出し方教育～国の政策の今後の方向性～」
自殺総合対策推進センター長・京都府立医科大学特任教授 本橋豊

平成28年4月に自殺対策基本法が改正され、「生きることの包括的支援」が自殺対策の理念であることが明記されました。若者の自殺対策、とりわけ児童生徒の自殺対策として「SOSの出し方教育」の重要性が認識され、教育現場での普及が喫緊の課題として注目されています。すべての子どもにライフスキルとしての「SOSの出し方教育」を行い、子どもたちから発信されたSOSを周囲の大人たちが的確に受け止めることができるようになることが「SOSの出し方教育」の事業を進める上で大きな目標です。最終的には、「SOSの出し方教育」を受けた子どもたちが、将来にわたり自殺のリスクを背負わなくてすむようにすることが望まれます。

自殺対策においては連携と協働がキーワードです。自殺対策はすべての人が関与すべき「みんなの仕事」であり、保健医療や教育関係者や家庭や地域などのすべての人々が関わり、行動し、支援することが必要です。連携は響きの美しい机上の修辞ではなく、それぞれの現場で地道な人間関係の構築に基づき、Action Programとして実現される必要があります。そのためには、現場の智慧と個別対応のノウハウを活かすことはもちろん必要ですが、同時に制度やAction Programを展開するための組織としての取組や仕組みづくりも重要です。ともすれば、自殺対策を「専門家の仕事」と位置づけて、「専門家に任せる」「素人は口を出さない」といった対応が取られることがあります。このような傍観者的対応を取ることがないようしなければなりません。学校の場合においては、学校医、スクールカウンセラー、精神科医といった「専門家」に任せれば安心といった発想からいったん離れることが必要です。自殺対策は「みんなの仕事」であり、当事者の目線で普通の人に関わっていくのだという意識変革が求められます。学校の現場であれば、校長を始めとする学校管理者、一般教諭、養護教諭、事務職員、保護者、地域住民、教育委員会、保健所、福祉事務所といった様々な職種や機関の人々が、専門家目線ではなく当事者目線で関与することが求められます。

国や自治体の施策はともすれば専門家志向になりがちですが、専門家の限界を知ることも大切です。児童生徒の「SOSの出し方教育」の政策展開にあたっては、「自殺対策はみんなの仕事」という考えをきちんと理解し、教育の現場、地域の現場、保健医療の現場などで連携と協働を確実に進めていくことが必要です。

平成28年度の厚生労働科学研究費補助金事業(学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究:研究代表者・本橋豊)の研究事業の一環として、北海道教育大学と自殺総合対策推進センターが協働して自殺総合対策における「命の教育」プロジェクトが開始された意義はきわめて大きいと考えます。北海道教育大学教職大学院の正規教育のカリキュラムに「SOSの出し方教育」を含む自殺対策の授業を組みこみ、将来教職に就く可能性のあるすべての学生に自殺対策の重要性を学んでもらう仕組みづくりが始まりました。また、教員の免許状更新講習時に自殺対策の講習時間を組み入れる試みも始まっています。これらの北海道教育大学教職大学院の先駆的取組が全国に広がることにより、学校教育における自殺対策の推進に着実に進展することになると期待しています。

自殺対策基本法一理念の明確化

誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して、これに対処していくことが重要な課題になっていることに鑑み、……

(第1条)

自殺対策は、生きることの包括的な支援として、全ての人がかけがえない個人として尊重されるとともに、生きる力を基礎として生きがいや希望を持って暮らすことができるよう、その妨げとなる諸要因の解消に資する支援とこれを支えかつ促進するための環境の整備充実が幅広くかつ適切に図られることを旨として、実施されなければならない。

(第2条の1)

自殺対策は、保健、医療、福祉、教育、労働その他の関連施策との有機的な連携が図られ、総合的に実施されなければならない。

(第2条の5)

児童生徒のSOSの出し方教育の根拠となる条文 自殺対策基本法(最終改正:平成28年3月30日)

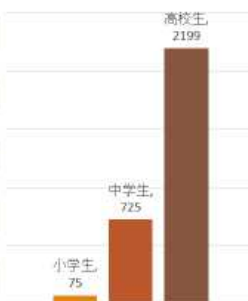
国及び地方公共団体は、大学、専修学校、関係団体等との連携協力を図りながら、自殺対策に係る人材の確保、養成及び資質の向上に必要な施策を講ずるものとする。(第16条)

学校は、当該学校に在籍する児童、生徒等の保護者、地域住民その他の関係者との連携を図りつつ、当該学校に在籍する児童、生徒等に対し、各人がかけがえない個人として共に尊重し合いながら生きていくことについての意識の涵養等に資する教育又は啓発、困難な事態、強い心理的負担を受けた場合等における対処の仕方を身に付ける等のための教育又は啓発その他当該学校に在籍する児童、生徒等の心の健康の保持に係る教育又は啓発を行うよう努めるものとする。

(第17条)

全国の小中高校生の自殺は10年間で約3000人
(資料:警察庁 自殺の概要 H18~27)

	小学生	中学生	高校生	合計
H27	3	101	237	341
H26	13	74	191	278
H25	7	78	197	282
H24	4	56	247	307
H23	9	55	237	301
H22	7	76	204	287
H21	1	79	226	306
H20	9	74	225	308
H19	8	51	215	274
H18	14	81	220	315
合計	75	725	2199	2999



画期的なSYLE研究の成果に学ぶ

欧州における学校ベースでの 自殺対策の効果検証研究

SEYLE (the Saving and Empowering Young Lives in Europe)研究

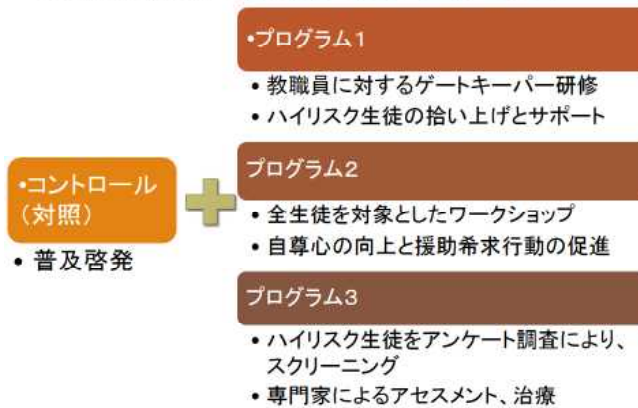
10か国、168校、10000人以上の15歳生徒を対象

3つの異なるプログラムの効果を検証

プログラム終了後、12か月までをfollow

①深刻な自殺念慮、②自殺企図の有無を評価

SEYLE研究で比較したプログラム



児童生徒の自殺予防教育として有効な介入は
ハイリスクアプローチかポピュレーションアプローチか

Seyle 研究により明らかにされた事実は・・・

プログラム2のみが統計学的に効果があった、ということ
(全生徒を対象としたワークショップ自尊心の向上と援助希求行動の促進)

ハイリスクアプローチではなく、ポピュレーションアプローチを
取るべきであることを示唆する結果。



生徒全員に自尊心の向上と援助希求行動のスキルを教えることが重要である。

(2) シンポジウム

シンポジウムは、本プロジェクトチームの安川氏が企画理由を述べた後、4名のシンポジストが発表を行った。阪中順子氏(四天王寺小中学校学校カウンセラー<SC>)は指定討論者、今川洋子氏(北海道深川保健所健康推進課長)、上島博氏(子どものレジリエンス研究会)、吉川和代氏(奈良県五條市立宇智小学校養護教諭)が発表者として実施された。

①シンポジウム企画理由

北海道教育大学教職大学教授 安川禎亮

私は、3年前より、北海道健康福祉部が主催する「子どもたちの SOS に気づき耳を傾ける実践研修」の講師として、北海道内を回っています。また、2年前から、授業や免許更新講習でも「自殺」をテーマに取り上げてきました。

教職大学院(ストレートマスターと現職教員がともに学んでいます。)では、生徒指導・教育相談分野の共通科目(必修科目)の中で、2コマ(90分×2)を自殺予防にあてています。また、免許更新講習においては、「動作とイメージによるストレスマネジメント教育」の科目名で、その中の90分「自殺」をテーマにした内容で行っています。

現職の先生方に「自殺」をテーマに授業や講習をしていますと、次のような感想が多く寄せられます。

- ・「自殺は子どもにとってナイーブな問題であり、かなり慎重に扱う必要がある。」
- ・「自殺は重たい内容なので普段は避けている部分があります。」
- ・「教師や私たちがとらえている死や生の定義も正しいかわからない。特に宗教の問題もあるので、何を子どもに伝えられるのか。今までは、死は必ずおとずれるから 生きている今の尊さを話したりしていた。」

つまり、現場の教員にとっては、自殺予防教育の重要性、必要性は十二分に理解しているが、積極的に取り組みがたいものがあるということだと思います。

自殺予防の展開・実践において、すでに成果をあげているオーストラリアでは、近年、改めて学校における精神保健活動の重要性に関する認識が高まっています。オーストラリアでは、2000年前後から MindMatters とよばれる包括的な学校精神保健プログラムが広く普及し、多くの中学・高校で実践されるようになってきました。MindMatters のキーワードは、①ストレス対処プログラム、②包括的な保健教育、③レジリエンス、④ソーシャルスキルトレーニングの4点です。授業プログラムで扱われる個々の教材のテーマは、「自殺の予防」、「いじめについて」「精神的健康を高めるためのコミュニケーションスキルの習得」「ストレスへの効果的な対処法」「精神疾患の正しい理解」などです。

日本では、「ストレスマネジメント教育」も「レジリエンス教育」もすでに2000年前後から、学校現場に紹介されてきましたが、まだ十分に広がりを見せていないように思います。

そこで、日本全国で自殺予防教育を推進しておられる阪中順子先生と北海道内において、先進的に取り組みを進めてこられた今川課長からそれぞれの取り組みを聴かせていただく機会を持ちました。

また、前述した大学院生の感想から、オーストラリアにおける MindMatters の実践を参考にする必要性を感じ、MindMatters の根幹である「ストレスマネジメント教育」と「レジリエンス教育」の実践者である吉川先生と上島先生からその取り組みを聞く中で、日本の教育環境に合った自殺予防教育をともに考えることができたらと思い、本シンポジウムを企画いたしました。

②子どもの自殺の実態と自殺予防教育の方向性

四天王寺学園小学校中学校 阪中順子

ここ 30 年間でたどってみると子どもの自殺者数は、毎年小学生は 10 人前後、中学生は約 100 人弱、高校生は 200 人前後で推移している。自殺者数全体から見れば約 1%であるが、少子化のため自殺率は過去最悪にまで上昇し、ハイリスクな子どもたちへの関わりや自殺予防教育が、学校においても避けておれない課題になっている。しかし、交通安全や薬物乱用防止などの予防教育が多く为学校で毎年実施されているのに対して、自殺者数は交通事故死者数の 5 倍以上に上るといふ深刻な状況があるにもかかわらず、自殺予防教育はほとんど実施されてこなかった。

昨年(2016 年 4 月)自殺対策基本法の一部改正が施行された。学校に対し、自殺予防教育に努めるよう求めているのが、大きなポイントの一つである。また、文部科学省は 2014 年に「子供に伝えたい自殺予防(学校における自殺予防教育導入の手引)」公刊している。それらの影響もあり、教育委員会や精神保健センター等主催で、自殺予防教育に関する教員研修が、以前よりも数多く取り込まれるようになってきた。

自殺予防教育の方向性として、「心の危機理解(心の危機に気づく)」と「援助希求(助けを求めろ)」の促進を目標とし、価値の押しつけにならずに児童生徒が主体的に考える姿勢を重視してきた。併せて、教育する大人が、子どもにとって SOS を発するだけの信頼できる存在であるかどうか問われていることも忘れてはならないであろう。また、特設の時間でプログラムを実施するだけでなく、保健などの教科の授業内容を自殺予防の視点から捉え直すことも重要である。

実施にあたっては、関係者の合意形成、適切な教育内容、ハイリスクな児童生徒のフォローアップの三点が前提条件となる。そのためには、教員研修、保護者への啓発、医療機関との連携などを丁寧に進める必要がある。特に教員研修が不可欠であるが、教員向けの自殺予防に関する研修の前後で、ゲートキーパー自己効力感尺度(GKSES)を参考に効果検証を行ったところ、事前は 9 項目の平均が 3.31、事後の平均が 4.44 となる結果を得た(7 件法:3 点「やや自信がない」、4 点「どちらとも言えない」)。自殺予防教育の実施に向けて、また、ハイリスクな児童生徒に関わるうえでも、自殺予防の教員研修は一定の効果があることが示された。

自殺予防教育は、今危機にある児童生徒の自殺を減らすだけでなく、生涯にわたる精神保健の基礎としても大きな意味を持つものである。自分自身の自殺の危険を切り抜ける力や危機にある身近な友人を支える手だてを身につけさせる点において、「未来を生き抜く力」を育む教育と言い換えることができるであろう。

【参考文献】

- ・森田展彰、太刀川弘和ら 自殺予防におけるゲートキーパー自己効力感尺度の開発 臨床精神医 44 (2)pp.287-299 2015
- ・阪中順子『子どもの自殺予防ガイドブック』金剛出版 2015
- ・高橋祥友『自殺の危険(第 3 版) 臨床的評価と危機介入』金剛出版 2014

③「“生きる”を支える取組～教育に携わる方々のための研修～」

北海道深川保健所健康推進課長 今川洋子

1 はじめに

北海道では、自殺者を一人でも減らすことができるよう、平成 21 年度から「自殺予防ゲートキーパー研修」(以下 GK 研修)を実施している。平成 24 年度からは『若者の自殺予防対策』として、教育関係者対象の GK 研修に変更し各種取り組みを実施したので報告する。

2 平成24年度 教員向け研修をスタート

子どもの自殺予防に取り組むことは、その後の若者の自殺予防にもかかわる重要な意味がある。まずは、夏休みに教員向け研修会を企画した。夏休み明けに児童生徒の自殺者が続き、冬休みにも追加で開催し、多数の出席があり研修ニーズが確認された。

【平成 24 年度研修内容】

1) 講演「子どもは死をどのように受け止めているか～子どもの死の概念～」(児童精神科医) 2) 基調講演・演習「自殺予防教育の実践から～教員としてできること～」(教員) 3) 講演「教員自身のメンタルヘルスを保つには～バーンアウトしないために～」(医師)

【研修後アンケート(抜粋)】

「具体的な危険因子を頭に入れてクラスを改めて見た時、心配だと思いう子がいることに遅ればせながら気付いた。日常、指導で口にする言葉は自分中心に考えた言葉であって相手の気持ちに添っていないことを思い知らされた。ロールプレイはとても良かった。」等。

3 平成25年度～基金終了を想定し、意見交換会設置、指導資料作成へ～

1) 教育関係者向け自殺対策意見交換会

研修内容を子どもの自殺予防に役立つ内容に改善し、地域に研修内容や研修システムが根付く方策を考えるため「教育関係者向け自殺対策意見交換会」を設置した。

意見交換会で出た主な意見は、「外部のリソースよりも、毎日接しているのは教員。全ての教育活動の中で観察などできるように、教育現場のスキルを高める」「どの教科でもおかしいと思ったら気づける。何気なくできることが重要」「ストレスマネジメントも必要」等の意見がある一方で、「先生方にこれ以上の負担をかけることは困難」「最終的に自分達で抱え込んで辛い、過剰な負担を強くない」といった教職員への配慮も共通認識した。

2) 3種類の指導資料(GK手帳、DVD、研修手引書(虎の巻))作成と研修会開催

道内津々浦々の教育関係者や地域の支援者に重要な知識やスキルを、ムリムダムラ無くお伝えするために、3種類の指導資料(GK手帳、DVD、研修手引書(虎の巻))を作成し活用していただくことが有効と判断した。資料を道内の小・中・高等学校・特別支援学校、市町村などに配布するとともに、その資料を用いた研修会を開催し普及を図った。

4 平成26年度～指導資料を用いた研修と保護者向け・子ども向けの資料作成～

1) 保護者及び児童生徒向けのハンドブックとポスターづくりインターネット配信

全道の児童生徒の保護者が子どもの SOS に気づき適切な対応ができること、また、児童生徒が自分自身や友だちの気持ちに気づき、援助希求行動ができることを目的に、保護者及び児童生徒向けのパンフレット等を作成した。さらに、資料の概要や入手先などを掲載したポスターを、道内の小学校・中学校・高等学校・高等養護学校・市町村(教育委員会・保健部局)などに配布するとともに、パンフレットの動画をインターネットで配信した。

URL : <https://sites.google.com/site/hokkaidouchotv/> ※Hokkai・Do・画

2) 子どもたちの自殺予防に取り組むための企画実践研修会

それまでの研修会は個人的な参加も多く、校内に浸透させるためには、指導的立場の方を対象とした企画実践研修会を開催する必要があった。

研修受講者は、校長・教頭、養護教諭、教諭、スクールカウンセラー、保健師等幅広く、実際に研修を企画する方が受講された。子どもたちに「死にたい」と相談された経験を、受講者の 43 % が持っていた。ほぼ全員が「理解できた」と回答された。

3) 「生きる取組」出前講座

平成 26 年 7 月～8 月開催の子どもの SOS に耳を傾けるための実践研修受講者に対し、出前講座の希望者を募り、希望校 11 校全てに出前講座を実施した。学校の要望にそって調整し、教員向けでは「子どもの自殺予防」「リラックス法」「カウンセリングマインドなど自殺予防に係る対応」を、児童生徒向けには自殺予防教育を行った。

出前講座で校内の教員と一緒に学ぶことが可能となり、リスクの高い子どもに対し、チームで支えるきっかけとなった。「子どものために開催したが、自分自身がエンパワーメントされた」との感想を持った教員もおり、知識のみならず自己効力感も向上した。

子どもたちの実態や意識を知るためのアンケートでは、「死にたいと思った」28.3 %、「友だちに『死にたい』といわれた」25.7 %であり、リスクの高さを関係者で共通認識できた。

授業後の感想は、新しく学んだことが「たくさんあった」「少しあった」88.4 %、いのちについて「よく考えた」「少し考えた」が 90.0 %であり、多くの学びが得られた。

5 取組のポイント

まずは、人のつながりが好循環を生んだこと。意見交換会メンバーや業者、同僚など皆で作りに上げたことで、1 人ですれば 1 の企画だが、多様な知恵で何十倍にも充実した。

2 点目は、段階的に取り組んだこと。「教えてもらう気持ちで：常に理解の途上にとどまり続ける」という姿勢で、何度も軌道修正し現場のニーズに近づけるよう改善した。

3 点目は、伝え方に細心の注意を払ったこと。音楽やイラスト、スタッフのホスピタリティも意識した。「伝える」ことは、情報提供だけでなく、大切なケアになる。ストレスマネジメントの呼吸法は、生涯役立つスキルであるが、会場全体も癒やされた。体験は理解を深くする。さらに、教員が、地域の支援者と出逢うよう配慮した。リスクの高い子どもの影にはリスクの高い大人がいる。地域の支援者も係わることで、家庭環境へのアプローチも可能になる。家族が子どもに与えるストレスは、友だちの対立や学校で起きる問題よりも遙かに大きい。* 1 教員が支援者と繋がれば、解決への一歩を踏み出せる。

本取組のスタート当初「生き心地の良い町」を同僚と輪読し、自殺予防因子（いろんな人がいてもよい、いろんな人がいたほうがよい、人物本位主義をつらぬく、どうせ自分なんてと考えない、「病」は市に出せ、ゆるやかにつながる。）の知見を共有した。* 2 ヘルスポモーション的自殺予防をめざせば、サポートしあえる地域の実現も夢ではない。

自殺予防の取組は、“生きる”ことを考える取組だ。大人も子ども「ピンチをチャンスに」「幸せって何だっけ」と考え、自分らしく「生きる」ことが叶うよう願っている。

【参考文献】

* 1NHK スペシャル取材班、『キラーストレス』、出版新書、2016 年、頁 216。

* 2 岡檀、『生き心地の良い町～この自殺率の低さには理由がある』、講談社、2013 年、頁 94

④レジリエンス教材におけるSOSの出し方教育

子どものレジリエンス研究会 上島 博

1 レジリエンス教育の可能性

レジリエンスとは、落ち込んでも立ち直れる精神的弾力性や、逆境にあっても適応的に育つ力を指す。レジリエンスはだれもが持っているし、育てられる部分もある。クライアントの抱える問題を探るべく人間の脆弱性を探ろうとしてきた心理学が、逆境から立ち直る人の「強み」に気づいた時にレジリエンスという概念が生まれたという。そうだとしたら、病院でも相談室でもない学校こそが、それを育てる表舞台となるべきではないか。

レジリエンスを支えるものとして様々な概念が指摘されている。したがってレジリエンスは「心の総合力」と言い換えることができる。

私たちの研究会は、小中学校の教員が中心であったので、授業で使える教材を作ることを主な活動とし、現在まで150の教材シートを発表してきた。

2 SOSの出し方教育につながるレジリエンス教材

私たちの教材づくりは自殺予防を目的としたものではなかったが、心の力の育成は広い意味で自殺予防につながる。

また、いくつかの教材は、「生活上の困難やストレスに直面しても適切な対処ができる力を身に付けさせる」という「SOSの出し方教育」の趣旨に合致したものである。その中のいくつかを紹介したい。

1) 「サポーターを見つけよう」

2) 「負けるな子ども」シリーズ

「コロがしんだ」「やる気が出ない」「いじめられた」「学校に行けない」

『女とばかり遊んでいる』と言われた』等

3) 絵描き歌（ニコリちゃん）

4) スマイルアゲイン（歌）

5) 立ち直り曲線

【参考文献】

深谷昌志監修 深谷和子・上島博他著、『子どもの「こころの力」を育てる ― レジリエンス ―』、明治図書、2009

深谷昌志監修 深谷和子・上島博・子どものレジリエンス研究会著、『「元気・しなやかな心」を育てるレジリエンス教材集1』、明治図書、2015

深谷昌志監修、上島博・木瀬達也・子どものレジリエンス研究会著、『「へこたれない心」を育てるレジリエンス教材集2』、明治図書、2015

上島博著、『イラスト版 子どものレジリエンス』、合同出版、2016

⑤生きる力を育む心の学習

奈良県五條市立宇智小学校養護教諭 吉川和代

1 はじめに

近年、社会の急激な変化や社会情勢は、子どもたちの生活に様々な形で影響を与え、身体だけでなく、いじめや不登校など心の健康問題が、顕在化している。自分の思いをうまく伝えられず、弱い立場になってしまう子や、人や物にあたって暴力的な行動をとる子ども。ストレスが原因と思われる不定愁訴が続く子ども。こういった行動や状態が、自尊感情や規範意識、コミュニケーション力を低下させることにつながるのではと懸念される。また、大きな環境の変化により、心が折れてしまうことも考えられる。よく、生きる力といわれるが、いろいろな問題にぶつかったとき、つぶれないよう、また、リセットして前に進んでいけるための予防教育としての心の学習が必要である。その中で、自分が大切な存在であると感じ、問題にぶつかった時の具体的な手立てや術を身につけていけるよう取り組んでいくことが大切であると考え。

2 心の学習におけるストレスマネジメント教育

心と体は相互に作用し、従来、密接に関係していると言われている。不定愁訴を訴える児童の中には、精神面での影響と考えられることが大いにしてある。保健室では、そういった子どもと直接関わる場面が多い。学級での問題や登校しぶり等で気持ちが不安定になった子どもを、まず保健室で、クールダウンし、心の切り替えの場とすることも多くなってきている。そういった現状を受け入れ、保健室では、個々の子ども達へ、ペアーリラクゼーションや呼吸法、また、肩上げなどのストレスマネジメントを取り入れ心の安定を図る。その後、行動のふり返りをサポートし、抱えていたストレスによる感情を収め、教室へとつなげている。また、予防教育としてストレスにうまく対処する力を身につけるため、発達段階に即した系統立った学級指導の中でストレスマネジメント教育を進めることが大切であると考え、取り組みを進めている。

3 心の学習としての命の学習

自信が持てず不安を感じている子どもや「自分を好きですか」という問かけに「いいえ」と答える子ども達。自尊感情が低く、そのことから周りとうまく関われない子どもが増えている。そこで、今、生きていくことを自信に変えて前に進んでほしいと考え、心の学習に命の授業を取り入れている。その中で、生命の誕生を知り、体験を通して自分たちが大切に育てられ、愛されていると感じ、命を大切にしていこうという意識を高めている。

4 考察

ストレスマネジメントを用いた個々への関わりでは、保健室という安心できる空間で1対1という環境下では、呼吸法やペアーリラクゼーション等実施しやすい。その結果、心の安定を図りやすく、自分の思いやしんどさを出しやすい。ストレスマネジメントを取り入れる前と比べて、教室への復帰が早くなっている。発達段階に応じた一斉指導では、繰り返し学習することで技法が身に付いていくと考えられ、家庭への広がりも感じられる。様々なしんどさや葛藤により、つらい思いをしている子ども達を目の当たりにする時、ストレスに対処するための術を教育の中で伝えていくことがいかに大切かを強く感じる。また、命の学習の中では、自分を支えてくれている人たちへの感謝の気持ちをより深め、受け継いだかけがえのない命を大切にしていこうという

気持ちを高めることができている。

今後、今以上に子ども達を取り巻く環境の変化が大きくなり、想定外の事が起こってくることも考えられる中、小学校教育の段階からストレスに対処していく力を身につけていくことや命の学習をすすめていくことが自尊感情を育成し、生きる力を育む基盤の一つになると考え、取組を進めていきたい。

(3) シンポジウムの総括

自殺総合対策推進センター・地域連携推進室室長 反町吉秀

皆さま、お疲れ様です。最後に少しお時間をいただきます。自殺総合対策推進センターの反町です。もともと私、法医学者を 15 年やっております、その時に中学生 3 人の自殺を体験してしまいました。

総括的に皆様のお話を聞いて、最後に良かったところや課題をまとめたいと思います。

まず井門先生からの今回のシンポジウム、命の教育の趣旨についてのお話がありましたがその中で少し私が注目しましたのが自殺を消費させる社会環境・教育環境、学校組織、教師の在り方を通して、問題を解決することが、教育実践研究の根幹であると言われて、このプロジェクトのお話をされました。

次に本橋センター長の講演ですけれども、新しく自殺対策のシステム、学校性格的な視点、あるいは政策的な視点からの話だったと思います。今日は学校の先生方が多いように見えますが、こういう政策的な話を聞かれる機会は意外に少ないかもしれませんが、新しい視点が提示されたのではないかと思います。省庁の鍋岡さんから、政策的な視点ということで話をされましたがその中で、文部科学省もこれまでやってこられた政策の検証が必要じゃないかということで、お手元の資料にもあるとは思いますが、スクールカウンセラーの事業もかなり増えてきているんですけども、なんでそれが自殺率の減少につながらないのだろうということを、非常勤の問題とかいくつか受け止める大人が地域にいるとか SOS を受け入れる、全職員に理解する職体制があるかどうかですね、問題提起をされたと思います。

それから、SOS の出し方教育、これはまだ学習指導要領にも書かれていないんですね、これを本格的に全国でちゃんとやるためには、書いていかなければならないと思われるわけですが、そのことの指摘、ただ、自殺対策基本法には、ちゃんと 17 条による SOS の出し方教育を学校でやりなさいと書いているということの指摘がありました。それから、文科省のについても問題提起がありました。それから、どこの場でやるかということに対して、今日はもう学校での話が中心だったのですが、学校だけの話で SOS の出し方を伝えるのではなく、地域の場合を、ね、そういうところも違ってくるところです。それから、これは学問的なところなのですが、ヨーロッパで行われた、大規模な、子どもに対する自殺予防教育の研究についてですね、指摘がありまして、統計学的に効果があったのは子どもに対する自尊感情の向上と SOS の出し方教育が一番効果があったという説明をして、はい。

次に、シンポジウムの演者の方々のお話に移りたいと思いますが、まず安川先生のほうから、これまで自殺予防教育を教員の方々にされてきたのですが、子どもにやるとなると、まあ結構大変だ。まずあの、やりやすいところかというと、レジリエンス教育とかストレスマネジメントのところの方がやりやすいんじゃないかというような話から始まってですね、各演者の方々の話にも伝わってですね。

まず最初に、北海道の深川保健所の今川さんの方から、北海道における学校の先生たちを対象にした

自殺予防教育、ゲートキーパー研修、これは平成 24 年度からそこに植え込みでやったのは全国的にも非常に先進的な取り組みでしたよね。その中で阪中先生はじめ、安川先生はじめ、様々な方と出合いがある中で、手作りで、実りがあったことも、詳しく丁寧にですね、ご説明いただいたと思います。そして次に、上島先生からレジリエンス教育の話をいただきましたけれども、非常に、まずレジリエンスってどういうものかわかりやすく話をしていただいたうえで、具体的な教材をメインにですね、非常に子どもたちに伝わるんじゃないかなという、実りある教材の事例をたくさん紹介していただきました。大変勉強になりました。

そして、吉川様からストレスマネジメント教育についてお話をいただきまして、非常に私もびっくりしたのですが、養護教員の先生が中心となってこれだけすべての学年でステージを考えて組織しているということです。今日養護教員の方もたくさんいらっしゃっているということで、今後の自殺教育は明るいなと考えさせていただきました。

最後に阪中先生の方から、まあずっと 20 年来取り組んでこられた、子どもに向き合う自殺予防教育の実践と、あとは政策的な視点からの話をしてくださいました。その中で、私は重要な指摘があったと思いますが、子どもが自殺率がどんどん上がってしまいうなかに社会の在り方や仕組みが変わってしまって、人間的なつながりがいろいろなところで途絶えてしまうところを最初にご指摘になったうえで、お話をされたところに非常に注目をさせていただきました。そして、そのあとの対話の中で、重要なポイントが阪中先生から各先生方に質問していただけたと思います。そこは蒸し返す必要はないかなと思います。

今日非常に新しい取り組みだったので、いろいろな点が新しく、ひとつはこういう政策的な話と現場の方々の実践的な話と、両方一緒に話をして議論をしたということは全国的にもあまりない取り組みかと思います。今後ですね、今日ご紹介があったような **good practice** を全国に展開していくためにはこういう議論が非常に必要で、今日はその始まりにしていければ、いろいろと考え方の違うところもあったかもしれませんが、お互いいろいろな学びがありますので、ぜひそういう新しいスタート、それこそ議論の一区切りになったのではないかと思います。それから、ちょっとひとつあるのはちらっと阪中先生と本橋先生が話をされていたのですが、学校だけが **SOS** を出す教育の場ではないかもしれないし、あとはやっぱり学校にも家庭にも居場所がない存在を意識して、地域において居場所づくりをどう進め、地域においてどう **SOS** の出し方を伝えて、そして地域でどう **SOS** を受け止めるのか、学校と地域と、いろいろな意見がありますが、この方々が連携していくこの課題に取り組んでいかななくてはならないということも、皆様の話を聞いて改めて確認しておきたくなりましたので、述べさせていただきます。

以上、雑駁な話ですがまとめとさせていただきます。どうもありがとうございました。

(テープ起こし 川俣智路)

(4) 参加者に対するアンケート調査結果

本シンポジウムは 100 席を設けて実施したが、スタッフも含めて 80 名以上の参加を得て、盛会だった。

参加者にはアンケートをお願いし、ご回答頂いたので、その集計結果を紹介したい。また、スタッフとして参加した院生の回答もあわせて紹介したい。

①参加者のアンケート結果

まずアンケート用紙を紹介し、その後に集計データの円グラフと回答者の記述を紹介する。62 名の方にご回答頂いた。

自殺総合対策における「命の教育」 参加アンケート

本日はお忙しい中、シンポジウムにご参加いただきありがとうございます。今後、さらにより良い企画を皆さんにお届けするために、以下のアンケートにお答えいただけると幸いです。よろしくお願いいたします。

※選択肢のなかで一番当てはまるものを、該当番号を黒く (●) 塗りつぶして下さい

① 全くそう思う ② 概ねそう思う ③ どちらともいえない ④ あまり思わない ⑤ 全く思わない

今日のシンポジウムについてお伺いします

- | | | | | | |
|--------------------------------|---|---|---|---|---|
| 1. テーマ「自殺総合対策における『命の教育』」は適切だった | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 2. 基調講演の内容は興味深く、満足している | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 3. シンポジウムの内容は興味深く、満足している | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 4. 総括の内容は興味深く、満足している | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 5. シンポジウムの進め方は適切だった | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 6. 本シンポジウム全体の内容に満足している | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |

今後のシンポジウムのためにいくつかお伺いします

- | | | | | | |
|-------------------------------|---|---|---|---|---|
| 7. 本シンポジウムを一番初めにどのようにして知りましたか | ① | ② | ③ | ④ | |
| ① 郵送チラシ ② 知人など紹介 ③ インターネット | | | | | |
| ④ その他 (_____) | | | | | |
| 8. 今後の聞いてみたいテーマを 1 つ選んでください | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| ① 子どもへの自殺総合対策 ② 「命の教育」実践 | | | | | |
| ③ レジリエンス ④ SOS の出し方教育 | | | | | |
| ⑤ その他 (_____) | | | | | |

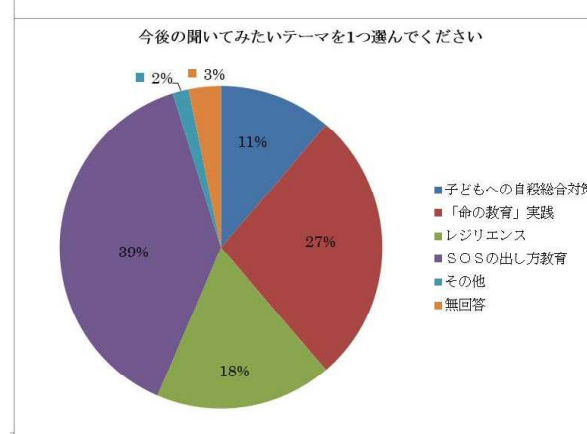
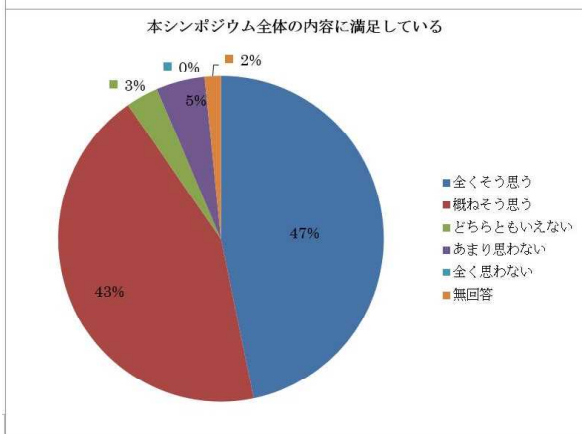
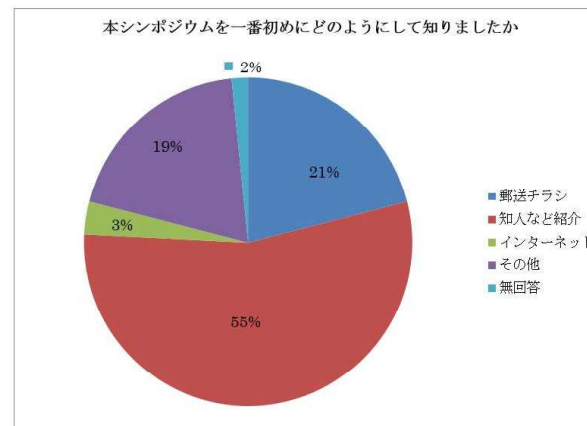
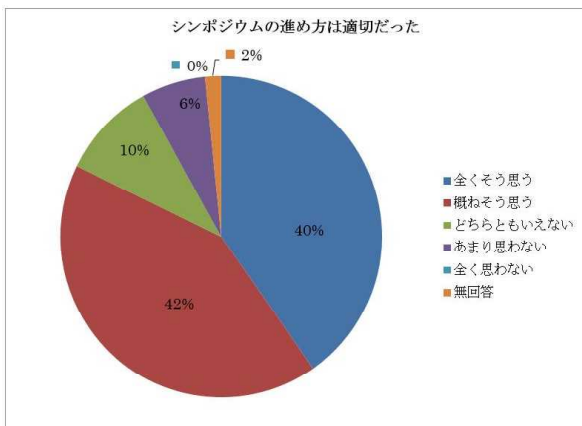
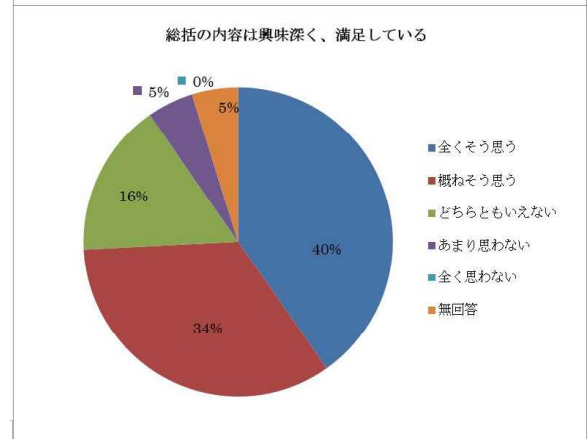
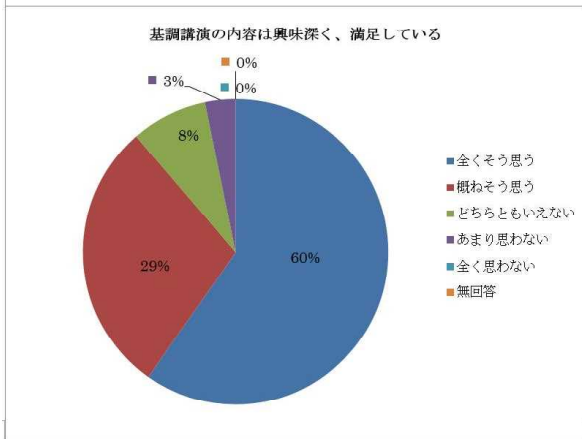
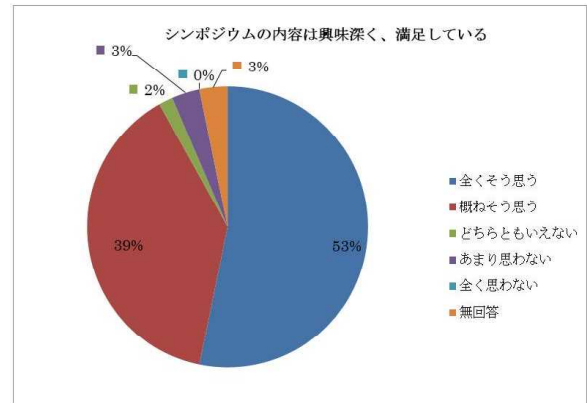
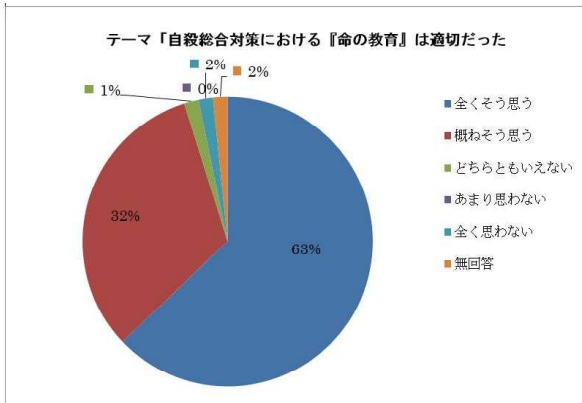
皆様のご所属などについてお伺いします

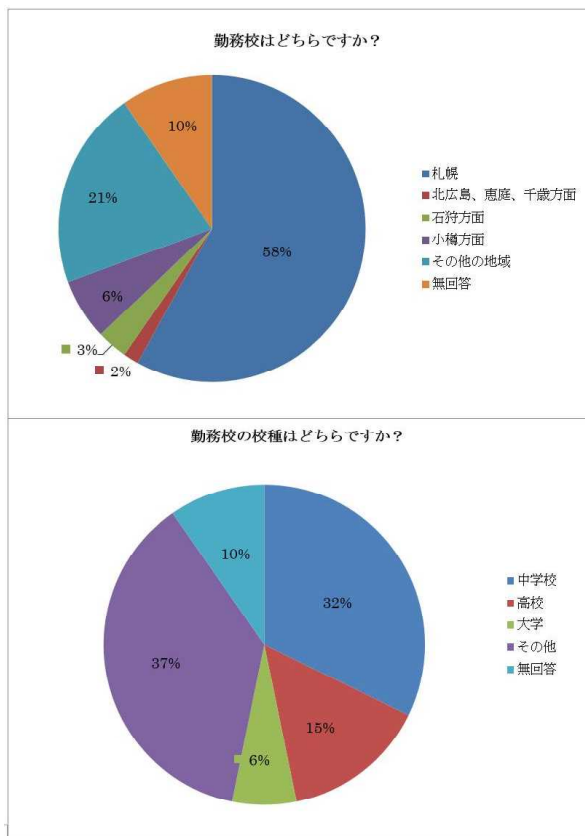
- | | | | | | |
|---------------------------|---|---|---|---|---|
| 9. 勤務校はどちらですか? | | | | | |
| ① 札幌 ② 北広島、恵庭、千歳方面 ③ 石狩方面 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| ④ 小樽方面 ⑤ その他の地域 | | | | | |
| 10. 勤務校の校種はどちらですか? | ① | ② | ③ | ④ | |
| ① 中学校 ② 高校 ③ 大学 ④ その他 | | | | | |

14. シンポジウムの中で特に興味・関心をもった内容があればお聞かせください。

15. 要望、感想等があればお聞かせください。

以上でアンケートは終わりです。ご協力ありがとうございました。





シンポジウムの中で特に興味・関心をもった内容があればお聞かせください

- 授業の様子、進め方、効果。
- 現場実践の内容。
- 出前授業に興味があり、実際のものを見たい。
- 教材について。
- 自尊感情とストレスマネジメントを高めることが必要。
- レジリエンス、ストレスマネジメント。
- SOS の出し方教育について。
- 色々な政策について学びました。
- SC と自殺率の相関関係が大変興味深かった。
- 教員向け GK 研修を受けてみたいと思いました。
- SEYLE 研究の結果説明と有効な介入方法について。
- 専門家に任せるのではなくみんなで考えることが大切。
- 効果を評価する方法を持ち PDCA をまわしていかなければならない。
- 援助希救行動を教育するという考え方。
- 特に吉川先生や上島先生の具体的な実践の内容について興味を持った。
- 本橋先生の「予防」「エビデンス」のお話。
- 阪中先生の話。
- 自尊感情の低下は、吉川先生の調べから、小 5 ～ 6 年から見られている。なぜこの時期から自

尊感情の低下が見られるのか。海外と日本の違いなどについて深く知りたかった。

- 子どもの命を守る、子どもの心を育むという点では道徳教育は不可欠だと思っているのですが、道徳に触れていたのは上島先生だけでした。厚労省の管轄ということで切り口を変えているのでしょうか。
- 基調講演の中で「何をしてはいけないか、ではなく、何をしたら良いのかを共に考える」、まずはやってみることが大切という内容が心に残りました。SOS の出し方教育の中でレジリエンスは誰もが持っているし、さらに育てることもできることを伝えたい。
- 文科省の施策と現場のニーズとのギャップを感じる。高額のS Cの増員もいいがより現場での教員を助け、子どもの悩みに関わるスクールサポーターの増員に予算をかけることが実質効果があると思われました。
- カウンセラーの数を増やしても自殺軽減につながっていないというショッキングな統計の結果。その分の予算を私は、学校教師の数を増やすこと、養護教諭を複数制にする等の方がサインを見つけられたり SOS 教育を行える余裕、取り組める余裕が生まれるのではないかと思う。
- 受け止める大人社会の問題→実際に機能する、社会全体の連携体制をどう作っていくのかも課題と感じています。

要望・感想などあればお聞かせください

- 時間が足りないのが残念
- シンポジストの先生方からのお話はどれも興味深かったので、最初の話提供の時間がもう少しあるといいと思った。
- シンポジストの方の話はもっと長く聞いていたいものでした。総括はもっと短くても良いと思います。
- お一人お一人の話の時間が短く、もっとゆっくり聞きたかった。実践資料もいただけるか、パワポの資料が欲しいです。
- 今回の各先生のお話のスライド資料がネット等で見ることができると嬉しいと思います。(時間の問題で省略されていたところが見たいです)
- 全体的にスライドの字が小さく、読みにくかった。パワーポイントであれば、28 ポイントくらいはないと後ろの方の人は見えないです。
- 配布資料に具体例がもっとあればよかったかなと思います。
- 多くの現場で研修の機会を待ち望んでおります。広くお知らせいただければ有り難いです。
- こういう機会が多くあってほしいことと、今回の内容を参加できなかった人や知らなかった一般へのアナウンスが必要ではないか。
- このような研修会をぜひ今後も定期的で開催していただき、実践交流もしていただけたらと思います。
- ・会場が札幌駅周辺であったのでわかりやすくよかった。
 - 道が作成した 3 種類の指導資料が学校になかったり、教員が知らないという意見も聞き悲しくなりました。(連携する際に)
 - シンポジウムはもっと時間を長くしてほしいです。(早口となったり、まとめまでいけないのはとても残念でした)
- このようにシンポジウムで先生方のお話を聞く機会があることに感謝したい。命の教育プロジェ

クトと札幌や北海道の各学校での取り組みや研修が相互に関連しあい、互いに高めあっていたらと思った。

- 教員の夏季、冬季休業中にあるとより多くの教育関係者に聞いてもらえると思いました。
- 多くの職種の方がお見えになっていたようです。横のつながりができるよう、シンポジウム講演会等ご案内を頂けると嬉しいです。
- 次回もあるといいと思いました。道内の実践の DVD を見てみたいです。
- SOS の出し方教育の研修をぜひ受けたい。
- 学校での研修に使えるような内容でした。
- 養護教諭の先生、SC などの協働も検討されていくとありがたいと思いました。
- 学校でもない家庭でもない地域の居場所づくりとして、サポートステーションがあります。それらの活用もしていただきたいと思っています。
- 自殺というシビアなトピックでしたが、温かい気持ちになるお話がたくさんありました。勉強になりましたし、社会にこういう人達がいるんだなという安心感も得られました。

- 学校現場でどのように自殺総合対策、命の教育に取り組んでいくか改めて考えさせられました。まずは仕事に追われている現実をどうにかしたいと思いつつ、できることから頑張っていきたいと思います。
- 子ども同士で心の調子を伝え合ったり支え合ったりする取組の重要性を改めて考えることができました。教育課程にどう計画していくかを学校全体で話し合うことが必要だと思いました。自殺防止教育に関する研修に参加するといつも関西弁の方々のお話が勉強になります。ありがとうございました。
- 色々な分野の方のお話を聞かせていただけて良かったです。今回の内容を、業務、子育て、子どもが友人に悩みを打ち明けられた時の対応の仕方（ゲートキーパー）の話を子どもにも伝えたいと思います。参加できてよかったです。ありがとうございました。
- 「命の教育」とは何かというところをもっと焦点化すると良かった。プレゼンは時間内できっちりできるように発表者は心がけなければならない。意見（論考）と根拠をもっと明確にしてもらいたかった。コントロール（＝呼吸法）のような狭い捉え方で良いのだろうか。呼吸法・コントロールだけで自殺者が減るとは思えない。ソーシャルスキルトレーニングについてもちょっと疑問である。ある特定の手法に捉われることなく広く実施していくことが公教育には必要ではないか。
- 基調講演の内容はもっと時間を割き詳しくするべきだと思います。話題提供者や講師などなかなか集めることができないメンバーなのに、参加者が少なすぎると思います。周知方法を検討すべきです。よいことをやっても集まらなければ意味がないと思います。ちなみにシンポジウムはシンポジウムの体をなしていないのではないのでしょうか。全てにおいて時間が短すぎると思います。講師の実践等を生かし切れていないと思います。
- 会場についてですが、マイクが遠かったりエコーがかかっているような感じで、お話の細かい部分が少し聞き取りにくかったです。
- 時間通告の方法を考えていただきたいです（チ～ン！はどうかと）。メモを渡すことでもよろしいのでは…
- お茶ごちそうさまでした。

以上が、回答結果であるが、これらのデータの分析と考察については、これから入念に行い、今後の研究と教育実践活動に役立てたい。回答してくださった皆様に感謝したい。

(5) スタッフの感想

スタッフとして参加した北海道教育大学教職大学院の院生(内4名は次年度から北海道や札幌との教員として勤務予定、1名は教職希望者)の感想も掲載しておきたい。これから教職に就く者として、本シンポジウムにどのような感想を持ったのか記述してもらった。

① スタッフ院生の感想

1) 教職大学院院生 A.K.さんの感想.

本講演は、自分の幼少期のことを思い出しながら受けていた。自分が小学校、中学校の時でさえ、「死にたい」「消えてしまいたい」という言葉を発している子どもは周りにいた。そして、私もその中の一人であった。自分はどうしていただろうと考えたところ、やはり友達に何と言葉がけしたらよいかわからなかった。「私はずっと味方だよ」という言葉はよくかけていたように思うが、大人に相談する術などはなかった。また、担任に相談した際には、本人に許可を取らずにクラスメイトに周知されてしまって、相談することはよくないとさえ思った記憶がある。しかし、それでは取り返しのつかない事にもつながりかねないと強く感じる事ができた。今までは、子ども側の立場にもあったが、教師になるということは子どもたちと一番長く生活するという事である。

今後、子どもに身につけさせたい力としてレジリエンスという言葉が印象に残った。何かに挫折したり傷ついたりしたことで、落ち込み、立ち直る力のない子どもはまだまだいるように思う。その力を身につけられなかったことで、大人になってから自殺してしまう人もいるのではないだろうか。私は、子どもの間だけでなく、大人になってからも健全に生きていけるような子どもを育てていきたい。そのためにも、レジリエンス教育は今後意識して取り組まなければならない教育だと感じている。子ども同士のつながり、親とのつながり、地域とのつながり、教師とのつながり、人は支えられて生きていることを自覚するだけでも生きる力とつながるように思う。今まで、具体的な手立てとしてどうすれば助けを求めることができるのかは教えられてこなかったように思う。これからは、子どもの自尊感情を高めるだけでなく、そのあとの対処の仕方も具体的に教えていく必要があると強く感じた時間であった。

2) 教職大学院院生 H.Mさんの感想

私は来年度から、中学校の教員として働く予定です。シンポジウムを聞く前までは命の教育に対して漠然としたイメージを持っていました。

本シンポジウムを聞いた中で、最も印象に残った言葉は「レジリエンス」という言葉です。レジリエンスは落ち込んでも立ち直れる精神的弾力性のことを指すことを知りました。レジリエンスは持って生まれるものだと思っていたが、それは育てられることを知りました。シンポジウムの中では、子どものレジリエンスのことが取り上げられていたが、児童生徒だけではなく、教師である自分自身にも重要なものであるという風に思いました。近年では、教師のうつなどの休職が目立っているので、自分自身もレジリエンスをもって、教員として頑張っていきたいと思いました。

他にも、子ども達には自分の中のSOSを伝えることだけではなく、他人へのSOSを打ち明けられた時にどのように対応するかを考えさせる指導を心がけていきたいと思いました。そのためには日

ごろから、子ども達とかかわりを持っていく必要があると思いました。

今回のシンポジウムで学んだことを現場に出て活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

3) 教職大学院院生 M.H.さん感想

学部や大学院での講義で、自殺や自傷行為、ストレスマネジメントについて考えたことがあり、知ったような気持ちでいた。しかし、このシンポジウムに参加して、例えば「死にたい」という気持ちで押しつぶされそうになっている子の気持ちに気づいたり受けとめたりするためには、力不足であることを痛感できた。

本日のシンポジウムでは、特に3つのことが私の心に残った。

1つ目は、本橋豊先生がお話しされた、スクールカウンセラーの制度が充実してきていても、自殺は減少しておらず、むしろ増加しているという事実である。学校だけではなく、子どもたちを外部とつなげることで多方面から、子どもたちを見守ることは重要であるだろう。しかし、ただ外部と関わりをもてばよいのではない。学年、学校全体で子どもたちの情報を共有し、学校全体で見守る体制ができて初めて外部とつなげる意味があるのではないかと考えた。

2つ目は、阪中順子先生のお話の中で紹介された、河合隼雄氏の「子どもから死を遠ざけるのではなく、死についての豊かなイメージをもたせる」という言葉である。私は、子どもたちに「死」を連想させるようなことは言わない方がよいのではないかという先入観をもっていた。しかし、最近、「死」をテーマにした絵本が話題となった。色々な立場から「死」について考えることができるようになるなどの「死」に対する「豊かなイメージ」をもつことは重要であると考え。他にどのような効果があるのか、引き続き学びたい。

3つ目は、吉川和代先生がお話しされた、ストレスマネジメント教育についてである。

子どもたちの悩みや不安などの気持ちが満杯になるまで溜めてしまうのではなく、少しずつそれを解消できるような方法を身につけることの重要性を改めて感じた。

春からは教師として、本日学んだことを生かしながら、子どもたち一人一人をよく見て、小さな変化を見逃さないような関わりをしたい。

4) 教職大学院院生 M.T.さんの感想

本シンポジウムから半月後には、自分が小学校の現場で教壇に立っているということを意識しながら参加させていただきました。私自身自殺についてこれまで深く考えたことはなく、自分からは遠い場所で行われているものという認識がありました。しかし、近年小学生が自ら命を絶つニュースがメディアで大きく取り上げられていくにつれ、「小学校教員としての自分は何をしていくことができるか」と考えなければならないと思っていました。

シンポジウムの中では、阪中先生の「自分の心のSOSだけではなく、友人の心のSOSに気づき助けてあげられるような子どもを育てていくことが必要」という言葉が強く印象に残りました。私はこれまで、児童が自分の居場所がないと感じているとき、教師がその居場所になってあげることができればいいという認識をしていました。もちろんこの考え方は大事だと思いますが、実際に学校で子どもが一番多くの時間をともにしているのは教師ではなく、周りにいる子どもたちです。いざというときに心の支えになるものがあれば、それは誰であってもいいこと、教師や親には相談できないことであっても、友達になら伝えることができる悩みがあることなど、教師が自らの手ですべてを解決しよ

うとするのではなく、子ども達とも協力しながら居場所を作っていくことができると考えさせられました。必要に応じて信頼できる大人につなげていく子どもたちとの関係を作っていきたいと思えます。

小学校段階での自殺者は異校種と比べればこそ少ないですが、それでも毎年自ら命を絶ってしまう児童がいます。また、小学校での児童とのかかわりは、中学校以降の行動にも直結するはずで、小学校段階だからこそできるかかわりを考え、「自分や命を大切にす気持ち」の大切さを伝えていきたいと思えます。

5) 教職大学院院生 S. H. さんの感想

今回、このシンポジウムに参加できたのは、大学院で先生からお誘いをいただいたからでした。そうでなければ、自分にはこのようなことを学ぶ機会がなかったと思えます。

講演やシンポジウムでのお話を聞いて、正直なところ驚きました。子どもの自殺という問題は、時々、ニュースなどで見聞きすることはあっても、小学校の教師になる自分には、ほとんど関係がない問題であると考えていましたが、決してそうではないとわかったからです。むしろ、真剣に考えなければならない問題だと思えました。どの子どもにも起こる可能性のある問題であると思えました。

シンポジウムのお話の中で、一番興味をもったのは、「わたしのサポーター」という教材でした。この教材シートの真ん中に、「わたし」がいて、その周りに自分のサポーターと思う人、つまり自分を守ってくれていると思う人をどんどん書き込むようになっていました。小学生低学年でも使える教材で、子どもたちが、お母さんなどの家族の名前を書いたり、友達の名前を書いたり、幼稚園の先生やご近所のおじさん、おばさんの名前を書いたりすることが想像できました。どんどん書き込むことで、守ってくれている人の多さに気づき、子どもの安心感がどんどんふくらむと思えました。そのように考えますと、この教材は、子どもの自尊感情を高める方法として、とても使いやすい優れた教材であると思えました。道徳の時間など、自分と周りの人との関係を考える時間の中で、この教材を効果的に使えないかという点を工夫してみたいと思えました。

4月から小学校の教師になる自分にとって、大事なことを考え、具体的に学ぶことができました。子どもたちの尊い命を守るために、また、自分の命もお互いの命も大事にしようとする子どもたちの心を育てるために、ここで学んだことを活かしたいと思えます。

6) 教職大学院院生 S. H. さんの感想

今回、「命の教育 2017 シンポジウム」に参加させていただきました。このシンポジウムのテーマは自殺に関することであり、学校現場において絶対に防がなければいけないことです。その学校現場において、子ども達の自尊感情の低さについて話題がありました。これは教育をしていく中である悪いところを直そうとすることが原因であると考えられました。子どもの良いところがあつて褒めることがあつても、それ以上に悪いところが目立ってしまい、注意を何度も受けることで子どもの自尊感情が下がってしまうのではないかと考えました。

養護教諭の吉川さんの話ではストレスマネジメントを取り入れて、心の安定を保健室で行っていました。保健室では、ペアーリラクゼーションや呼吸法、また、肩上げなどのストレスマネジメントを取り入れ、その後、行動のふり返りをサポートし、抱えていたストレスによる感情を収めていました。学級のような子どもが多くいる場所よりも、保健室のような1対1で対応できる環境下では心の安定が図りやすいです。もし、子どもが心に余裕がない不安定な状況下にあるときは、養護教諭の先生と

連携を取り、心のよりどころをしっかりと確保することが必要だと考えました。

最後に、阪中先生の話であった「きょうしつ」という言葉がとても印象に残っています。「気づいて、寄り添い、受け止めて、信頼できる大人に、つなげよう」の頭文字からなっています。特に「気づいて」の部分は私自身、一番重要なことだと思っています。子どもの些細な変化に気づけたことで、自殺を未然に防ぐことができるかもしれないと考えたからです。この気づきは大人から子どもまで、他者を見ることによって気づけることなので、「きょうしつ」という言葉を通して、未来ある子どもたちに伝えていきたいと思います。

②スタッフ教員の感想

1)梅村武仁特任教授(事務局長)

○命の教育2017シンポジウムを終えての感想～命を支える様々な手立てへの期待～

本橋豊自殺総合対策推進センター長の講演の中で、特に印象に残った一つに、我が国の自殺者数の推移は、ピーク時より1万人減少し、全体的に減少傾向だが、19歳以下については、逆に自殺率が上がっている、という内容がありました。文科省のスクールカウンセラー活用事業が開始されて以降もその傾向が続いており、原因については明確にされていないとお話だったと記憶しています。

小・中・高生を中心とする未成年者の自殺対策は、道内はもとより、国内での喫緊の課題であるとの認識を新たにしたところです。

思い出されるのは、私が中学校に勤務していたとき、同様の出来事があり、ご家族の深い悲しみをはじめ、生徒や教職員全体に大きな動揺のあったことです。教育委員会の強力なサポートと教職員の強い結束力のおかげで、時間をかけて、関係者の心のケアに努めることができました。

今回の参加者の中に、スクールカウンセラーとして学校で勤務している臨床心理士の方や小・中・高等学校の養護教諭の方が多数いらっしゃったのは、日頃、子どもたちの心に寄り添う中で感じている危機感があるからだと思いました。ある養護教諭は「リストカットする子どもたちのことが心配です。」と語っていました。現代社会を生きる子どもたちの心の状況は、家庭や地域の環境、学校での人間関係、子ども自身の生きる希望の持ち方など、様々な要素が絡み合って実に複雑です。また、悩みの種類も一人一人違うと思われれます。

そのような中で、今、求められるのは大まかに次のようなことではないか、と考えました。

- ① 周りの大人や子ども同士が、一人の子どもの心の危機に気づくこと。
- ② 子ども自身の心のしなやかさを育てること。
- ③ 子ども自身が自分の心の危機に気づくとともに、SOSを発したり対策を講じたりする力を身につけること。

①については、現在、「悩み調査」等が各学校で定期的な実施され、効果を上げています。教育委員会主催の研修会において、記入された調査用紙については、消しゴムで消した跡やためらいがちな記述などにも注意を向けることの有効性が確認され、徹底されています。

今川課長さんの発表によると、保健所主催の研修会においても、予想をはるかに超える参加者があったとのことで、子どもたちの心の叫びに何とかして応えたい大人の切実な願いがうかがわれました。

②と③の具体的な方法として、シンポジウムの中で、安川先生や吉川先生から「ストレスマネジメント教育」の実践の発表がありました。また、上島先生から、小学生向けに開発された「レジリエンス教材」の発表がありました。いずれも、参加者の方々の興味を強くひいたものと思われれます。4月から正式に教壇に立つ大学院生の感想に「目の開かれる思いだった。大変参考になったので、現場に

おいて活かしたい。」との言葉がありました。

①②③のすべてにかかわって、学校における「自殺予防教育」の必要性について、阪中先生の提案がありました。実践上のリスクについてのお話もありました。身内に自殺者がおり、その心の傷が癒えていなかったためか、途中で泣き崩れてしまった子どもがいたそうです。阪中先生は、様々な配慮が必要であることを前提にしつつも「子どもたちを救うために、それでも自殺予防教育を行うべきです。」と力強く主張されていたことが印象に残りました。

その他、北海道学校図書館協会の皆様のご協力で、命を守り、生きることを支える図書の紹介が準備されています。子どもの生きる心を支え、育てる様々な方法を通じて、自殺者ゼロの実現を願わずにはられません。

2) 川俣智路准教授(事務局総務)

○自殺防止対策から「より良く生きる」ための支援へ～命の教育2017シンポジウムに参加して～

今回のシンポジウム「自殺総合対策における『命の教育』—生きる支援に向けた SOS の出し方教育—」に参加して、自殺総合対策における最も効果的で重要な点は、いかにして子どもが「より良く生きる」ことを支援できるかという点であることを痛感した。本橋センター長による基調講演で示されたように、SEYLE 研究において青少年の自殺防止への取り組みとして効果が認められたものは、子ども全体を対象としたワークショップや自尊心の向上と援助希求行動の促進を促す取り組みであった。これまでの自殺対策のイメージは、一部のメンタルヘルスの悪い子ども、あるいは生活環境の悪い子どもといったハイリスクの児童・生徒に対して専門的な観点からサポートするものであった。しかし SEYLE 研究は、自殺総合対策に必要なことはハイリスクの児童・生徒への対応だけではなく、すべての子どもたちに対してどのように働きかけることができるかを検討しなければならないことを意味している。これからは、「一部の子どもたちに専門家が関わる」アプローチから、「すべての子どもたちに教育に関わる大人が協力して関わる」アプローチへの転換が求められていることがはっきりと示されたと言えるだろう。

本橋センター長が基調講演の中で、臨床心理士が各学校に配置されたのにもかかわらず、データ上では青少年の自殺者は減少していないという指摘に対しても、私が臨床心理学を専門としていることもあり、とても関心を持った。現状では、スクールカウンセラーは週に1回から2回しか学校を訪問することができない。そのため、どうしてもその業務はリスクが高い児童・生徒、危機を迎えている子どものケアに時間を割かなくてはならないのが現状である。しかし今回のシンポジウムでは、自殺予防のためにはハイリスクの児童・生徒へのケアだけではなく、児童・生徒全体への働きかけが効果的であることが明らかになっている。したがって、いまのスクールカウンセラーの勤務形態では自殺予防に対して十分に貢献することは難しいのではないだろうか。スクールカウンセラーが自殺予防に貢献するためには、勤務日数の増加や常勤としての雇用が必要となってくるだろう。

後半のシンポジウムでは、子どもたちに関わる教員や専門職の養成、ストレスマネジメントやレジリエンス教育といったテーマが取り扱われ、すべての子どもたちを対象に「より良く生きる」ことができるスキルをどう身につけさせるか、その具体的な実践方法が提示された。今後はこうした取り組みが、他の地域や実践者によっても実施され、その有効性がよりはっきりと確認されると、全国に展開することがより現実的になるのではないかと感じた。

今後の課題として、ハイリスクの子どもたちだけではなく、子ども全体への働きかけが有効なことを教員に必要な知識として体系的に学んでもらうこと、児童・生徒が「より良く生きる」ためのスキ

ルを身につけさせるための取り組み、とくに SOS の出し方教育を実践できる実践者を養成していくことが挙げられる。これらは自らの課題でもあると考え、今後取り組んでいきたい。

本シンポジウムへの講演やシンポジスト等をお引き受け下さった本橋豊氏、阪中順子氏、今川洋子氏、上島博氏、吉川和代氏、反町吉秀氏、そして、後援して下さった北海道教育委員会並びに札幌市教育委員会に御礼申し上げます。

道教大教職大学院「命の教育」プロ始動 6本の柱で自殺対策推進 札幌でシンポジウムを開催

道教育大学教職大学院（院長・井門正美教授）は十九日、ホテルポールスタール札幌で「命の教育2017シンポジウム」を開催した。教員、養護教諭、学

道教大教職大学院は、自殺総合対策推進センター（JSSC）センター長・本橋豊京都府立医科大学特任教授と連携して、「命の教育」プロジェクトを立ち

上げた。自殺という課題の最も重い課題を見据えた教育研究の立場から、①人間形成と成長の基盤となる教育として「心を育てる読書教育」②日々の悩みや人間関係のあつれき等から自身を解放する「ストレスマネージメント教育」③苦難やストレスに耐え立ち向かう「レジリエンス教育」④保健衛生



に留意し体づくりや健康を促進する「健康教育」⑤自殺者を一人でも減少させる人間関係や社会基盤づくりを推進する自殺総合対策「命の教育」（特にSOSの出し方）⑥教職大学院講義と教員免許状更新講習への「命の教育」の組み込みの六つの柱で総合的な自殺対策を展開していく。

初め、同プロジェクトの初仕事として、命の教育シンポジウムをホテルポールスタール札幌で開催した。自殺総

合対策推進センターの本橋センター長が「生きる支援に向けた児童生徒のSOSの出し方教育」国の政策の今後の方向性をテーマに基調講演。わが国の施策としての自殺総合対策について、学校教育に焦点化した話を展開した。

続いて、同教職大学院の安川禎亮教授が「コーディネート」を務め、阪中順子氏（四天王寺学園小中学校スクールカウンセラー・文部科学省児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議委員）、今川洋子氏（深川保健所健康推進課長）、上高博氏（二つのレジリエンス研究会代表）、吉川和代氏（奈良県五條市立学智小学校養護教諭）の四人のシンポジストが発表と討論を行った。

児童生徒の自尊感情や自己有用感をいかに醸成するか、他者存在の意義を学習の場でどう実感させるのか、若者の自殺をどう食い止めるのかなど、具体的な事例とともに白熱した議論を交わした。最後に、同推進センターの反町百秀地域連携推進室長が総括を行った。

会場の出席が満席になるほど参加者が訪れ、同プロジェクト事務局長を務める同教職大学院の梅村武仁特任教授は「参加者は教員、養護教諭、学校カウンセラー、保健師、教育委員会や医療福祉関係者、一般市民で、幅広い方面からの参加が得られたことが成果だった」と話していた。

また、同プロジェクト代表の井門教授は「自殺を生じさせる社会環境や教育環境、学校組織や教師そのものの在り方を問い直し、問題を改善することこそ、教育実践研究の根幹である」とらえている。命を大切に、生きることへの志向性を促進する「命の教育」プロジェクトを道教委や札幌市教委とこれまで以上に連携して進めていきたい」と語った。

今月末に「命の教育」プロジェクトのホームページ（http://www.do-labo.com/）を開設し、先の六本の柱に基づく教育研究活動を紹介する。問い合わせは、メール（truchi.kyo@krci.com）または、担当・川俣智路准教授まで。

また、同プロジェクト代表の井門教授は「自殺を生

じさせる社会環境や教育環境、学校組織や教師そのものの在り方を問い直し、問題を改善することこそ、教育実践研究の根幹である」とらえている。命を大切に、生きることへの志向性を促進する「命の教育」プロジェクトを道教委や札幌市教委とこれまで以上に連携して進めていきたい」と語った。

また、同プロジェクト代表の井門教授は「自殺を生

じさせる社会環境や教育環境、学校組織や教師そのものの在り方を問い直し、問題を改善することこそ、教育実践研究の根幹である」とらえている。命を大切に、生きることへの志向性を促進する「命の教育」プロジェクトを道教委や札幌市教委とこれまで以上に連携して進めていきたい」と語った。

また、同プロジェクト代表の井門教授は「自殺を生

図2 新聞記事(北海道通信、2017<平成29>年3月28日)

3. 命の教育プロジェクトホームページの構築

本年度実施したもう一つの事業として「命の教育ホームページの構築」(命の教育 HP)について、その概要を示しておきたい。命の教育 HP は、およそ半年間の研究活動で、私どもの研究方針を立てて、「命の教育 2017 シンポジウム」へむけた準備を行いつつ、これと並行して「命の教育 HP」のコンテンツを作成し掲載したので、年度末ぎりぎりに完成した。まだ、未完成であったり不十分であったりする内容もあるが、引き続き、本橋代表による平成 29 年度厚生労働科研費「地域の実情に応じた自殺対策推進のための包括的支援モデルの構築と展開方策に関する研究」(平成 31 年度まで)に参加するので、HP の充実を図りたい。

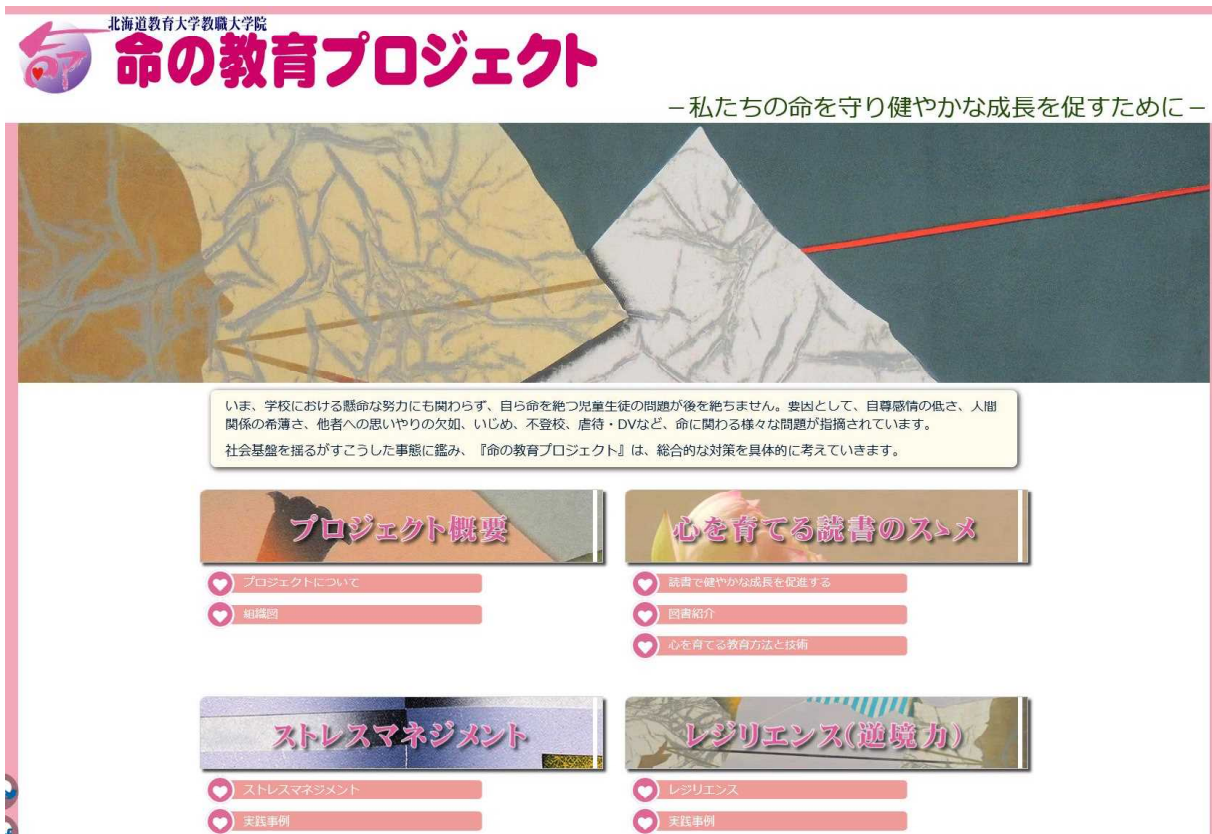


図3 命の教育プロジェクトトップページ

- ①人間形成と成長の基盤となる教育として、「心を育てる読書教育」
- ②日々の悩みや人間関係の軋轢等から自身を解放する「ストレスマネージメント教育」
- ③苦難やストレスに耐え立ち向かう「レジリエンス教育」
- ④保健衛生に留意し体づくりや健康を促進する「健康教育」
- ⑤自殺者を一人でも減少させる人間関係や社会基盤づくりを推進する自殺総合対策「命の教育」(特に、SOS の出し方・気づき方教育、自殺対策学習)
- ⑥教職大学院講義と教員免許状更新講習への「命の教育」の組み込み

なお、2017 年度からは、教職大学院の組織的研究として展開するので、ホームページに掲載した組織図を掲示しておきたい。

組織図

北海道教育大学教職大学院「命の教育」プロジェクト組織図

2017年4月から

「命の教育」プロジェクト

代表	教職大学院長	井門正美
副代表	札幌校院長補佐	追分 充
副代表	旭川校院長補佐	水口正博
副代表	釧路校院長補佐	近藤逸郎
副代表	函館校院長補佐	小松一保

「命の教育」プロジェクト事務局



プロジェクトメンバー(各校)

札幌校	旭川校	釧路校	函館校
井門正美	稲葉浩一	梅本宏之	阿部二郎
梅村武仁	笠井稔雄	近藤逸郎	小松一保
追分 充	藤川 聡	寺嶋正純	中村吉秀
小野寺基史	藤森宏明	森健一郎	橋本忠和
川俣智路	水上丈実	安川禎亮	三浦清和
浜野雅輝	水口正博		
姫野完治			
前田輪音			
龍島秀広			

図4 2017(平成29)年度 研究組織図

以上、「命の教育」プロジェクトについて紹介したが、以上の活動内容については、当プロジェクトのホームページを開設 (<http://www.ido-labo.com/edu4life/>) し、今後も随時更新するので、閲覧していただければ幸いです。

なお、ホームページに掲載している絵画、版画、写真はアトリエタマ・玉川研治氏(版画家・陶芸家)の作品である。

作品一例

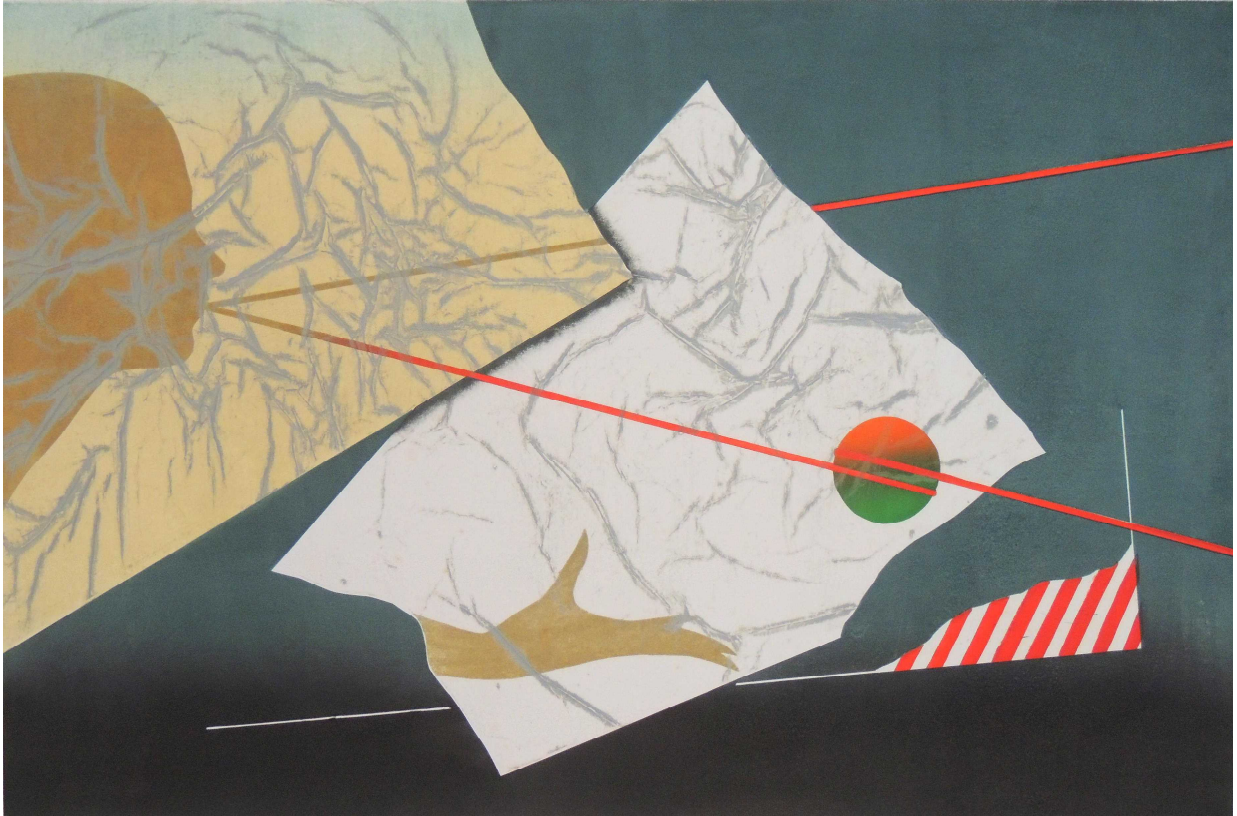


図5 トップページ作品(玉川研治氏作)

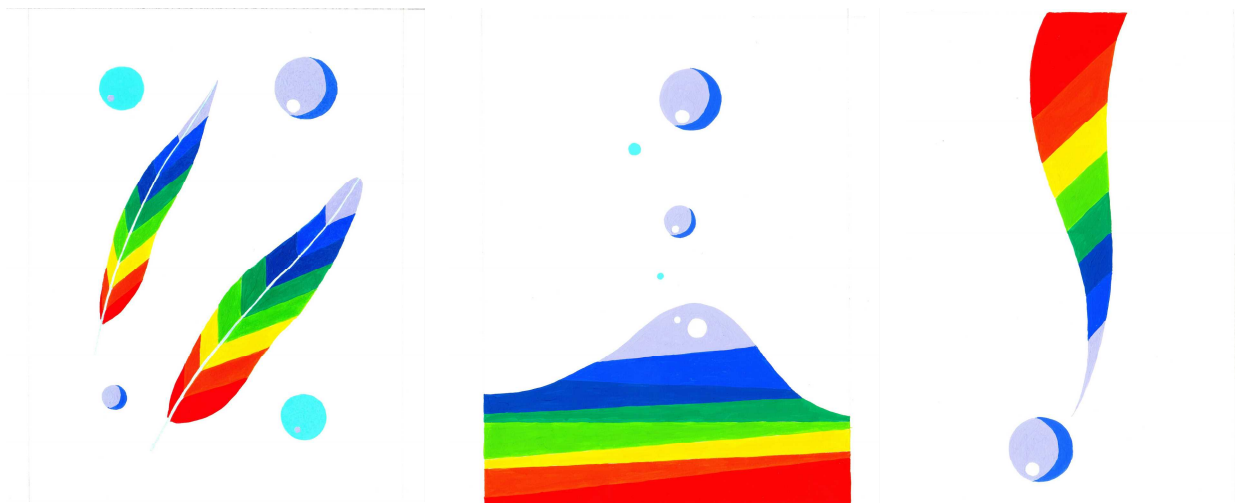


図6 自殺対策学習カード使用イラスト(玉川研治氏作)

【参考資料】



hue

「命の教育」プロジェクトの発足と今後の展開

— 命の教育2017シンポジウム趣旨説明にかえて —


北海道教育大学教職大学院 院長 井門正美

「命の教育」プロジェクトの始まり

「命の教育2017シンポジウム」
主催 北海道教育大学教職大学院「命の教育」プロジェクトチーム
共催 自殺総合対策推進センター
(Japan Support Center for Suicide Countermeasures<JSSC>)

「命の教育」プロジェクトチームの設立
自殺総合対策推進センター(JSSC)との連携に端を発している。

自殺総合対策推進センターとは
昨年(2016年)4月1日の改正自殺対策基本法の施行と共に発足した。
この法律の新しい理念と趣旨に基づき、学際的に関係者が連携して自殺対策のPDCAサイクルに取り組むためのエビデンスの提供を行うと共に、民間団体を含めた地域の自殺対策を支援する機能を強化することが、当センターに課せられた使命である。



JSSCの初代センター長・本橋豊先生
京都府立医科大学の特任教授も兼任
前任校の秋田大学では、医学部教授として公衆衛生学講座を十数年の長きにわたり運営され、特に、**自殺率が全国トップであった秋田の自殺対策に取り組み顕著な成果を収める。**

井門も前任校は秋田大学で16年間勤務(2015年3月まで)
私は秋田大での最後の2年間、教員免許状更新講習推進センター長の任にあったが、その時、私の教育部門を管轄する理事・副学長が本橋先生だった。2014(平成26)年3月に本橋先生が秋田大を去るにあたり、とあることで意気投合した私たちは、**医学と教育学の関連領域での共同研究を約束した。**

本橋先生が**厚生労働科学研究費補助金「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」**(平成26-28年度)を展開し、特に、**JSSCのセンター長に就任したことから、学際的な取組みを推進される中で、私も北海道教育大学教職大学院も研究チームを組織して本研究に参加した。**

「『命の教育』プロジェクト」と命名

「命の教育」プロジェクトの目的

教育の問題状況
いま、学校関係者の様々な努力にもかかわらず、子どもたちの自尊感情の低さ、他者への思いやりや倫理観の欠如が問題視されている。いじめ、虐待やDV、自殺など、命に関わる問題が社会基盤を揺るがす大きな問題ともなっている。

教育の根幹
幼児、児童生徒、学生、大学院生、そして保護者に対して、命の大切さ、生きることの意味・意義を伝えることを改めて教育の根幹と捉えなければならない。

本プロジェクトの目的
教育実践では、自殺は最も重いテーマで喫緊の課題だが、その自殺を生じさせる社会環境や教育環境、学校組織や教師そのものの在り方を問い直し、問題を改善することこそ、教育実践研究の根幹であると捉え、命を大切に、生きることへの志向性を促進することをプロジェクトの目的とした。

「命の教育」プロジェクトの研究実践の柱

- ①人間形成と成長の基盤となる教育として、「心を育てる読書教育」
- ②日々の悩みや人間関係の軋轢等から自身を解放する「ストレスマネジメント教育」
- ③若さやストレスに耐え立ち向かう「レジリエンス教育」
- ④保健衛生に留意し体づくりや健康を促進する「健康教育」
- ⑤自殺者を一人でも減少させる人間関係や社会基盤づくりを推進する自殺総合対策「命の教育」(特に、SOSの出し方・気づき方教育、自殺対策学習)
- ⑥教職大学院講義と教員免許状更新講習への「命の教育」の組み込み

昨年(2016)10月から組織的に研究開始

現在、上記主要テーマに関する研究を進めている。

「命の教育」プロジェクトのホームページ

命の教育ホームページを開設 成果公開
(<https://eis-web.sap.hokkyodai.ac.jp/edu4life/DanaInfo=www.ido-labo.com/>)
現在構築中!! 今後は随時更新

命の教育プロジェクト
— 私たちの命を守り健やかな成長を促すために —

いじめ、学校における暴力など様々な問題が、自ら命を絶つ児童生徒の増加を招きかねない。深刻な自殺対策の推進、人間関係の改善など、教育の根幹にありたい。いじめ、虐待、暴力など、命に関わる問題を教育実践研究で解決する。社会基盤を揺るがす大きな問題に臨み、「命の教育プロジェクト」は、総合的に対策を具体化し推進していきます。

公開は、3月末の予定です。
デザイン・レイアウトも調整中



「命の教育2017シンポジウム」は、「命の教育」プロジェクトの最初の事業


○本シンポジウムの登壇者

講演 本橋豊先生


シンポジウム 阪中順子先生
今川洋子先生
上島 博先生
吉川和代先生
総括 反町吉秀先生

皆様にご感謝申し上げます。

○後援 北海道教育委員会／札幌市教育委員会
御礼申し上げます。




本日の参加者の皆様の忌憚のないご意見・ご感想をうかがえたらと存じます。どうぞよろしく願いいたします。



ご静聴、有り難うございました。 井門

続いて、基調講演は、本橋豊先生です。



【註】自殺総合対策推進センター(Japan Support Center for Suicide Countermeasures<JSSC>)について
JSSC は、昨年(2016年)4月1日の改正自殺対策基本法の施行と共に発足した。この法律の新しい理念と趣旨に基づき、学際的に関係者が連携して自殺対策のPDCAサイクルに取り組むためのエビデンスの提供を行うと共に、民間団体を含め地域の自殺対策を支援する機能を強化することが、当センターに課せられた使命である。

初代センター長である本橋豊氏(京都府立医科大学特任教授兼任)は、前任校の秋田大学では医学部教授として公衆衛生学講座を十数年の長きにわたり運営され、特に、自殺率が全国トップであった秋田の自殺対策に取り組み顕著な成果を収めている。